６月４日（土曜日）ひったかの夜

西の山には鉄人２８号が叫ぶ。がんばろうと。

東の山にはガンバレ東日本の文字が浮かぶ。

揺れる灯りは祈りにも似て。

にぎやいだ町の通りは遅くまで人垣が絶えませんでしたが、やがて一つ一つの灯りが消えていきました。一本一本のろうそくが祈りを終えていくようです。私は一抹のさみしさを感じながらもひったかの夜に満足して家路につきました。

６月５日　おしぐらんご

子供のころ、学校帰りに金浦湾をとりまく対岸でよくおしぐらんごの練習風景を見ていたものです。それから今日までの長きにわたって、途中途切れていた時期はあったものの、地域の人たちは保存会を中心によくその伝統継承のために頑張ってこられたことだと頭の下がる思いです。

地域の人たちは、昔から海に生き、海に育てられ、海に糧を得ていました。櫓を漕ぐことに誇りと生きがいを持っていたわけです。干拓で海を失い、職も失った人たちの誇りと生きがいは新たなものに変わったかもしれませんが、心にも体にも、また地域社会の中にも海とともに生きてきた誇りが根付いているような気がするのです。ましてや保存会の皆さんの櫓をこぐ姿にはかつての誇りを具現化する力がみなぎっています。

東日本の被災者支援のために今回は、削減した経費を浄財とし義援金として東北に送るとした今回の取り組みは、いろんな意味で大きな意義がありました。参加の子供たちには毎年５０００円の図書券が送られますが、被災地に届けようと、その趣旨を理解しました。昼食とお菓子の袋だけ送られました。支えた地域の人たちや観

客の皆さんに振る舞われる「お菓子や餅の大盤振る舞い」を中止し、被災地に届けることにしました。中心になった保存会の会員はいつも反省会を兼ねて一堂に集まる「だん払い」を、昼食をとりながらするのですが、簡潔に短時間でお互いの労をねぎらいながら済ませ、義援金に回しました。こうして行事にかかわるそれぞれの立場の人たちが同じ目標と意義を感じながらおしぐらんごを支えました。

私自身も、会員の一人として、さんばしで船を待つ子供たちの安全に気を付け、応援係として子供たちと楽しみながら声を張り上げ応援しました。最年少は小学３年生です。桟橋からの応援は息が合っていました。子供たちの応援に駆け付けた学校の先生方も、きっとこの子たちを誇りに思っていると信じます。

小学３年生も保存会のお兄さんの助けを得てしっかりと踏ん張って櫓をこいでいます。

4

わずかに赤がリードでしょうか？まだまだ中盤。もうすぐラスト１００メートルです。